

パネル発表「継続飼育—教師と子どもと保護者とともに—」

光村 智香子

1 はじめに

2007年9月、他園から2羽のウサギを迎え、5歳児の子どもと共に飼育する生活が始まりました。そこに子ウサギのハイが誕生します。その誕生に立ち合った子どもたちは現在小学3年生になりました。

ハイの飼育は誕生に立ち合った保育者の元で2008年度は3歳児、2009年度は引き続き4歳児へ、そして2010年度は新たな4歳児へと引き継がれていきました。

今回は、継続する飼育の保育の実践から見えてきた子どもの育ちと、現在の小学3年生・5歳児・4歳児の3世代の子どもたちと保護者のハイへの思いが重なりながら、その愛情が受け継がれていく様子を伝えたいと思います。

そして、このような経験の連続性は新学習指導要領につながるものと考えます。

2 実践の経過

(1) ハイと共に育つ3歳児

初めての園生活で2か月のハイと出会った子どもたち。保育者は、母と離れて寂しかったり、不安そうにしていたりする子どもたちと野菜や摘んだクローバーをやったり、食べている様子を見たりして「食べたね、おいしいねって」「お顔かいかいって」とハイの動きに言葉を添え『ハイちゃん、かわいいね』の気持ちを伝えつつ安心感を培っていきました。

まだ不安を残しつつもケージの周りで落ち着いていた子どもも自分で撫でられるようになると、そのことが大きな自信となり進んで餌やりをするようになったり、その姿を見た他の子どもたちも同じように世話するようになったりしていきました。『世話をしてあげる』ことで自分たちが『大きくなった』喜びを感じている様子です。

また、ウサギになって遊んだり、園庭のサークルの中で共に過ごしたり、一緒に追いかけてっこをしたりしながら、より親しみを持ち『世話をしてあげる』存在から自分たちの『仲間』へと変わっていきました。

(2) ハイと共に育つ4歳児

1年間ハイと生活してきた子どもたちは進級し、保育者・ハイと共に新入園児を迎えての新生活が始まりました。新学期当初は進級児が保育者と共に積極的に世話をしていました。保育者の側で不安にしていた子どもたちも、ハイや世話の様子を見ながら

一緒に世話をし始めたり、ハイの話で笑ったりして少しずつ気持ちがほぐれていきました。

また、友だちに目が行きにくかった子どもがうまく抱っこできるようになると、ハイも自分にはおとなしくひっついてくることに自信をもち、友だちから「ケンちゃんに（サークルまで）連れて行ってもらおう」と頼まれたり「こうしてお尻持ったらいいねん」と得意に伝えたり、他の子どもも聞いてやってみようとしたり、など友だちとかわり始める姿もみられました。

そして、ハイの母親クロの死にも出会いました。教育実習生に「ひとりぼっちやし寂しいねん」とハイの身の上を語る子どもに実習生が「友だちになってあげたら？」との問いかけに「友だちいーひんし寂しいのと違う、家族がいいひんし寂しいねん。僕がお兄ちゃんになってあげる」と一緒に暮らしてきたことでハイの気持ちに寄り添う言葉で表現するようになりました。

2月のハイの誕生日にはそれぞれがパーティに向けての準備を始め、グループのみんなで喜んで祝ったり、3月には一緒に大きい組になることを楽しみに思ったり、と自分たちとハイが同じ立場に立って生活していることが感じられます。

(3) 保育者と共に留まるハイと進級した5歳児

ハイと1年間ないし2年間を共にしてきた子どもたちは進級して5歳児になり、ハイと保育者はそのまま4歳児に残りました。

すると、登園後に4歳児の保育室までやってきて「お〜いハイちゃん、久しぶり。ハルちゃんやで〜、覚えてるか？ちっちゃいとき一緒に遊んだやろ？」とハイに声をかけにきたり、「まだウンコいっぱいやん！ヨシノちゃん、お世話したげよか？」と心配したりする姿が見られました。

また、「ありがとう！助かるわ〜」と任せると、4歳児が様子を見ている中で世話を始め、4歳児に水の替え方を教えてくれたり、まだ抱けない子どもの代わりに園庭のサークルまで抱っこして連れて行ってくれたり、と困っていることに気付いて力を貸してくれるなど、自然な異年齢のかかわりも見られました。

(4) ホームステイをとおして

初めてのホームステイ前には、保育者が「シートが〇枚でタオルでしょう？おしっこちゃんとできるかなあ？迷惑かけへんかなあ？」と独り言を言い

ながら準備しているのを見て、保護者の方が「我が子をお泊りに出すみたいですね」と自分の育児と重ね、保育者の擬似親子ぶりを笑われてしまいました。

また、預かってくださった保護者の方々が、次の方も心配だろうから、と自らノートに世話の仕方をまとめて書いてくださったり、子どもとハイの遊んだ様子を写真付きの育児日記のようにつけてくださったり、たたんだケージやホームステイ用品一式を持ち帰る用の袋を縫ってくださったり、とよりホームステイの輪が広がるようかかわっていただきました。日記を見て『楽しそう』と新しい家庭にも預かってもらえることになったり、各家庭なりの日記が増えていったり、とホームステイの楽しさや大切さが伝わり始めています。

(5) 小学生とのかかわりの中で

ウサギの飼育を最初に経験した子どもが就学後もウサギのニュースを聞きつけて心配したり、期待したり、喜んだりと様々な感情のうねりと共に幼稚園にやってきます。

交流活動でやってきた1年生の頃は幼児期にウサギと親密だった子どもが「ハイや～！かわい～！」「なつかし～！」と呼びかけたり、「(トイレ)まだやん、やったげよか？」と世話を手際よくしてくれたり、3歳児の子どもたちはその勢いに圧倒されじっと見たりハイとの再会を喜ぶ1年生の賑やかな雰囲気を感じたりしていました。また、その翌日幼稚園の子どもに絵本を作って届けにきてくれたりもしました。

1年生と2年生で迎えたハイの誕生日にはそれぞれお祝いの手紙やプレゼントが届いたり、それらがきっかけとなり4歳児でパーティが始まったり、誕生日の喜びを手紙に綴るといった表現を生んだりしました。

3年生になると赤ちゃんウサギが幼稚園にやってきたニュースを知り、何度も会いにやってきます。

3 結果—見えてきたこと—

○継続飼育はここをつなぐ

【教師が世話しつつ語りかける雰囲気の中で育まれる安心感】

不安定な時期にある子どもにとって、世話する保育者の援助のもとでウサギのからだの温もりや柔らかさに触れることやしぐさを見つめることが、心を開放し安心感を得ていく経験になっている。また、保育者はウサギに心があるように話しかけたり、言葉話を話さないウサギの思いを代弁したりするかわりが多く見られる。それは、人もウサギも同じ動物であり生きてることを伝え、教育要領にある『…親しみや畏敬の念、生命を大切にす気持ち、公共性、探究心などが養われるように』との願いがあるからであり、そのことは子どもの心情的な感性

を育てている。

【自分で触れて抱ける喜びから自信へ、その姿に刺激を受けて挑戦する仲間、喜びの連鎖】

世話や抱っこができることで自信をもったり、そんな友だちの姿を身近に、自分もしてみようと挑戦したりする心が子どもから子どもへと広がる様子がわかる。

【教師の育て心が保護者につながるホームステイ、ウサギの育児日記の誕生そして広がり】

教師が育ての親として見せる姿を通して、『育てる営み』の共感を保護者とも育んでいます。その思いは学年を超えた保護者間でも広がっていくことがわかる。

○継続飼育は人をつなぐ

【交流活動を通して】

ハイとの再会から懐かしさを感じたり、幼稚園での自分を振り返ったりし、その思いを就学後ならではの書き言葉を使って絵本として表現している。彼らとのふれあいやその後が届く絵本を通して、3歳児の子どもたちにも1年生のハイを『かわいい』『大好き』と思う気持ちは伝わり、互惠性の学びあいがある。

【ハイの誕生日を通して】

お祝いの気持ちをプレゼントや手紙で表しハイに語りかけるように伝える。自分と同じように寄り添う関わり合いがあることが分かる。

小学生にとっても大事なハイの誕生日であることを感じたり、自分たちのハイを祝ってくれてありがとうの気持ちを絵で表現したり、ハイが誕生日を迎えたことと自分が大きくなる嬉しさを重ねて誕生日の喜びを手紙に綴ったり、と様々な思いを感じている。

【赤ちゃんウサギのニュースを通して】

小学校での教育実習生との別れで寂しかった気持ちを気分転換するためにもやってきました。幼稚園でウサギと遊んで楽しい気持ちになった経験を思い起こして、ハイや赤ちゃんウサギのウメたちに会いに来れば「癒やされる」との情感を抱いたからであろう。

4 おわりに

幼児期に味わったウサギとの思い出を胸に、ウサギと教師との情緒的な深いつながりを今もなお育んでいます。就学後の子どもたちのハイを大切に想う気持ちは、飼育を引き継いだ子どもたちにも受け継がれています。さらには、ホームステイや子どもからの情報からウサギの飼育の保育が家庭へも受け継がれています。

(京都教育大学附属幼稚園)